

報告②

「数えられないもの」「目に見えないもの」をどう評価するか ——地域研究の立場から

山本博之

山本 私たちは2008年にアチェで学際調査を行いました。ただし、今日の私の報告は、アチェでの学際調査の内容を詳しくお話するのではなく、アチェでの学際調査やその後のスマトラでの地震被災地での調査を含めて考えてきたことを地域研究の立場からお話するものとなります。

まず、前置きとして、災害を日常生活の延長として捉えるという考え方についてお話しします。一般に、災害は、日常生活から断絶された一時的な状態だと考えられていると思います。そのため、災害によって壊れたものを直すことで元の日常生活に戻せるという考え方がありました。このような「被災前に戻す」という発想に対して、災害とは、その社会が抱えている潜在的な課題、もともとあることはわかっているけれどもタブーや慣習だったりして言えない、あるいはあ

ることが見えていないかもしれない、そういった課題が極端なカタチで表れたものと見る捉え方があります。人が亡くなったり、物が壊れたりするので、対応を先送りにはすることができず、その場で解決しなければいけないというカタチで課題が人々の目の前に現れるため、災害は、その社会に関わる人みんなの合意の上でその課題に対応するきっかけを与えるものでもあります。

そう考えると、災害は、日常生活から切り離されて一時的に現れた状況ではなく、日常生活の延長上に、それがちょっと極端な形で現れたものだというのがわかります。そのため、被災前に戻すのではなく、被災を契機によりよい社会にするという、復旧ではなく創造的な復興が必要になります。そのためには、当然その社会が被災前にどのような課題を抱えていたかを理解しなければならないので、そこに地域研究の役割があると思います。

しかし、地域研究者は人道支援事業に役立つかと尋ねられると、人道支援関係者の多くは、ちょっと強い言い方をすれば、地域研究者は役に立たないと答えるんじゃないかと思います。これに対して、もし地域研究者が人道支援関係者の思うように役に立たないとしたら、それは専門性に対する両者の認識にずれがあるためだということを強調したいと思います。地域研究者に対するよくある誤解は、研究対象地域のことを何でも知っている人という誤解です。そんなことはありません。地域研究者は、地域のことを隅から隅まで知っているわけではありません。そうではなく、今、現場にあるものを見て、そこからその地域が抱えている潜在的な、場合によっては目に見えない課題を掘み出すというのが地域研究者の専門性です。

今、地域の課題を掘み出すと言いましたが、地域研究者は、今、この場で起こっている短期的・局所的な課題よりも、長期的、あるいは人類社会に共通の課題に目を向ける訓練を積んでいます。だから、「今、どここの地域にこれだけの大きさの地震が起きました、現場ではどんなことが起こっていると考えられますか」と地域研究者が尋ねられたとしたら、その問いにまじめに答えようとすると、「今はグローバル化の時代ですから・・・」というように笑い話のような答えが出ないとも限りません。

だから、現地に行っていない地域研究者に緊急時についてそんな質問をしてもしょうがないんです。人道支援の関係者が現地入りする前にその地域のことを聞いておこうと思って、地域研究者に「今度どここの地域に支援に行きますがどうでしょうか」と尋ねることがあると思い

2010年12月14日
共生人道支援シンポジウム
「被災社会との共生を実現する復興・開発を目指して」

「数えられないもの」 「目に見えないもの」をどう評価するか ——地域研究の立場から

山本博之
京都大学地域研究統合情報センター

はじめに

・災害・・・日常生活の延長

社会が抱える潜在的な課題を極端な形にして人びとの目の前に示し、その課題を直ちに解決しなければならないと社会に迫るもの
「被災前に戻す」ではなく「被災を契機によりよい社会を作る」支援

・地域研究者はなぜ「役に立たない」のか

×「研究対象地域のことを何でも知っている人」
○「現場を観察して地域の潜在的な課題を把握する訓練を積んだ人」(地域のかたち)
短期的・局所的に現れる課題・・・ 長期的で人類社会に共通した課題・・・○
×「いま ● 地域に地震が起こったら何が問題になるか」

・地域研究者はどう「役に立つ」のか

地域研究の知見を踏まえた事業評価
支援現場では支援対象地域の潜在的な課題に対応した支援を実施
成果報告では「数えられるもの」「目に見えないもの」が優先される

ますが、地域研究者としてもこれに何か答えようとして、「あの地域はイスラームが強いですか」とか言うことになります。そうすると、「ビールは飲めますか」とか「男性の医師が女性を診察しても問題ありませんか」とか尋ねられたりしますが、地域研究者は、この手の質問に対して平常時についてなら答えることはできるでしょうが、災害で混乱しているときに現場が今どうなっているか、従来の慣行がどうなっているのかについては、むしろ地域研究者が知りたがっていることであって、それを尋ねられてもどうしようもないという思いがあります。

それでは、地域研究者はどう役に立ちうるのか。地域研究の知見を踏まえた連携としては、地域の潜在的な課題や「地域のかたち」を踏まえた事業評価という点に地域研究者の役割があるだろうと思います。

はじめにお断りしておきますが、地域の潜在的な課題を踏まえた評価やそれへの対応は、人道支援の現場でもすでに行われています。だから私の話は、人道支援の人にはわからないので地域研究者が教えてやるということではありません。人道支援の現場にいる人は、現場の様子を見てそれによく対応しています。ただし、多くの場合、人道支援の実務者はそのことを言語化できていません。対応はしているけれど、それをうまく言葉で捉えられていないため、おそらく本部に報告するときにもそのことがうまく伝えられていないだろうし、したがって本部も現場の活動内容を広報するときには「どここの地域で何人を対象にどのようなことをしました」というように、数えられるもの、目に見えるものの評価しかできないことになるわけです。

人道支援事業がその地域の潜在的な課題に対応している部分をちゃんと見出して、そこを伝えることが重要だと思いますが、地域研究者にはそれができというのが私のお話したいことです。その例を、今日は時間がある限りで3つご紹介します。

まず、2004年スマトラ沖地震・津波のアチェの例です。アチェは、被災前は30年に及ぶ紛争地でした。国軍と独立派のゲリラが武力衝突していたところでした。津波の被災者支援はこのような紛争地で実施されました。そのため、現地入りした人道支援団体には国軍とどのような関係をつくるかという問題が出てきます。ここで紹介するある支援団体は、アチェのW地区付近で支援事業を行うことになったのですが、その地区の国軍担当者から、「この場所まで入ってくるのはかまわないが、ここから先のW地区は独立派ゲリラの支配地域で非常に危険なので入るな」と言われたそうです。この支援団体はそれを聞いて、W地区にも支援対象者はいるけれど、国軍の指示に従って、W地区よりも手前で活動を実施しました。

W地区の手前には大きめの町があり、毎週水曜日に大きな市場が立ちます。市場が立つということは、隣近所の人がやってきて、物売り買いするだけでなく情報交換もするということです。その支援団体は、市場のすぐそばに借りた土地で農業技術研修を実施して、参加した人たちが大きなナスを採ったりしていました。

その後で地元の人たちにいろいろ聞いてみると、W地区は独立派ゲリラが支配している地域ではないと言われます。本当は国軍が支配している地域だと。内陸部なので開発は進んでいないけれど、土地は豊かなのでいくらかでも開拓してゴムを植えることができる。それを国軍が独り占めしていて、外から人に入ってもらいたくないから、紛争だ、危険だと言ってよその人が入らないようにしていると言われます。

アチェは長く紛争地でしたが、このような仕組みがアチェの各地にあって、それが紛争という状態を作ってきました。紛争というのは、ある意味で口実のようなもので、実際には資源を囲い込んで取り合っている構造があって、それを正当化したり外から見えないようにしたりするために紛争だと言っているということです。

この支援団体は、W地区に入るなど言うならそれに従うと言って、その手前の町で、みんなから見える市場の近くで支援事業を行いました。そうすると、そのうちに国軍の地区担当者がやってきて、W地区の住民も支援を求めているからW地区でも支援事業をするようにと言ってきました。もともと危険だから入るなど自分たちで言っていたのに、今度は入ってよいと言いはじめました。それなら入ろうということでその支援団体がW地区に入ると、他の団体もW地区に入って支援事業を進めるようになり、そのうちにW地区は誰でも自由に出入りできるようになりました。外部に閉じられていた地域が開放されたわけです。

これは、人道支援団体が「紛争地では支援事業をしない」という態度を貫いて、しかも地元

(1)アチェ
(2004年スマトラ沖地震・津波)

- 「国軍とどのように関係を作ればよいのか？」

国軍：「内陸のW地区は独立派ゲリラの支配地域で危険なので入るな」
地元政府・住民：「W地区は国軍の支配地域。国軍が農園開発して利益を独占している」
- 「紛争地」から「被災地」に

国軍の指示に従い、W地区の隣の市場付近で農業技術支援を実施
国軍：「W地区の住民も支援が必要なのでW地区で事業を実施してよい」
「紛争地では支援事業をしない」から「紛争地ではない」に





アチェ県、難民の多いW地区

市場、近隣の人が集まり情報交換する

市場付近で行った農業技術研修の風景

の人々にとって魅力的な支援を行うことで、紛争地と言われていた地域を紛争地ではない地域に変えていったということです。人道支援団体の活動を通じて紛争地が外に開かれていく、別の言い方をすると紛争地が被災地になっていくということです。

これはW 地区という小さな地域の事例ですが、人道支援が紛争構造の解消に寄与した事例として非常に大きな意義があると私は思います。でも、この事業についてこの支援団体の本部に報告されたときには、私は実際に調べたわけではないので想像ですが、「どここの地域で何人の被災者を対象に農業技術支援を行って、何人の住民が裨益した、いくら使った」という報告だったと思います。そういう報告はもちろん必要ですが、それと別に、紛争地から被災地になったというような成果を評価して示すことも必要であって、ここが地域研究者が関わる部分ではないかと思っています。

2 つめは、スマトラ島の南西部のベンクル州の例で、ここでは2007年に地震が起こりました。

私は人道支援団体の初動調査に同行して現地入りしました。

そのときに見たことですが、ある団体が被災者に米を配っていたところ、米をもらった人たちがものすごく怒りだして、米の袋を道路に投げつけて蹴飛ばし、袋を破いて米を地面にばらまいてしまいました。しかも何袋も。せっかく支援団体が被災者が困っているだろうと渡した米を、道路に捨てて、足で蹴って使えなくしたんです。悪いことというのか、いいことにだったのか、それがちょうどテレビのニュースで放映されて、インドネシアの全国で放映されました。あまりに強烈な映像だったので何度も繰り返し放映されたようです。それを見た他の地域の人たちは、どうしてあの人たちは支援物資を蹴り捨てるのか、おかしいのではないか、と思うわけでした。

政府も事情を調査することになったようで、現地の郡役所に問い合わせの電話をかけてきました。ちょうど私が郡長にインタビューしているときに問い合わせの電話がかかってきて、インタビューがしばしば中断されて郡長が電話で答えているのを聞いていると、次のような事情が見えてきました。

この地域の住民には避難のかたちが2種類ありました。1つが幹線道路沿いで、自分たちの家の前に避難している人たちです。家があまり壊れていない人たちもいますが、家の前にテントを張ってそこに避難しています。もう1つは、幹線道路沿いの学校や市場やヤシ農園に集団で避難する人たちです。

この地域は、もともと人が少なく外からの移住者が多い地域でした。移住したばかりのときは沿岸部に住んでいますが、生活に余裕が出てくと幹線道路沿いに家を買って移り住みます。移る余裕がない人たちは沿岸部に留まって、幹線道路沿いに住む人たちに雇われて漁に出たりします。

幹線道路沿いに住んでいると、物も情報も目の前を通るし、家の前にテントを張っておくと車で通りかかった支援団体が支援物資をくれたりします。あるいは、報道関係者にインタビューされたりします。ところが沿岸部に住む人たちは、津波の危険があって幹線道路沿いよりも危険度が高いのに、支援や報道の車はそこまで入ってきません。ふだんの生活でも開発から置いていかれたと思っているところに、災害で支援からも置いていかれそうになって、支援を求めて幹線道路まで出てきたけれど、行き場がないので学校や役所などの公共施設の敷地に大きなテントを張って避難しました。ところが、幹線道路沿いと沿岸部とでは行政上の区分である郡が違ってきます。そのため、幹線道路沿いの役所に支援団体が来て、敷地内に避難している人たちを含めて支援物資を供与しようとする、幹線道路沿いの住民が、その支援物資はもと自分たちの郡に与えられたもので、よその郡から来たお前たちが横取りするのかというような言い合いになり、日頃の不満が溜まっていたこともあって、そんなことを言うなら米はいらないと蹴飛ばしたということです。

さすがに食べ物を足で蹴飛ばして地面に撒き捨てるのはいかがなものかと思いますが、でもこれも1つの表現のしかたではあるわけです。この地域では、被災前に、幹線道路沿いの住民と沿岸部の住民の間に確執があり、日頃から不満をもっていた沿岸部の住民がそのことを支援者や報道関係者を通じて世界に示したということになります。このとき同行した支援団体は初動調査だけだったため、ここで読み解かれた「地域のかたち」が実際の支援事業に反映されることはありませんでしたが、米を撒いている人を見て、単に治安の問題がありそうだと捉え



るだけでなく、そこから「地域のかたち」を読み解いて支援プログラムに反映させることが必要だということです。

3つ目は、2009年の西スマトラ地震の話です。地域研究者に西スマトラとはどういう地域かと尋ねると、イスラム教の影響が強い地域であるとか、母系制なので女性が土地や家を所有しているとか、男性は出稼ぎに行くとか、そういう話ばかり出てくるんですが、西スマトラ地震で明らかになったこの地域の重要な特徴はそれとは違うものでした。

地震直後に西スマトラに入って調査した工学の先生から、帰国後に、なぜこの地域の人は不便で危険な尾根に家を建てて住んでいるのかと質問されました。そのとき私は西スマトラと言えばイスラム教や母系制や出稼ぎぐらいしか思いつかず、適切な答えが見つからなかったのですが、現地に行ってみてわかったのは、この地域は雨と水がとても多いということでした。川が急で、毎年9月頃から12月頃の雨季になると、冠水状態になったり、尾根が崩れて道が通れなくなったり家が倒れたりして、水がコントロールしきれなくなります。だから、水がない尾根に家を建てて住むしかないわけです。

水が来ないように不便で危険な尾根に住むのであれば、日常的な水はどうやって確保しているのか。屋根で雨水を受けて家の中の貯水槽に溜めていました。乾季には、谷を降りて水を汲んでくるしかないので、水はあまり使えないということになります。

この地域では、家ごとに貯水槽があります。地震によって家はあまり壊れませんでした、多くの家で貯水槽が壊れました。そのため、見かけの上では建物の被害は大きくなくても、衛生的な水をどう手に入れるかという問題が生じていました。

また、すぐに冠水したり道路がふさがったりするので、家は一カ所に長く住むのではなく、不具合が出てきたらどんどん建て替えて移っていくという発想が強く、家は簡単に小屋のように造っておけばよいと、耐震建築のことは当然考えていませんでした。そのため地震が来ると崩れて別のところに建て直すという悪循環が見られました。

西スマトラで今回の地震で明らかになったのは、衛生的な水をどう確保するかということと、耐震建築をどう身につけるかという2つの課題があることでした。このことは、通常の地域研究者に聞いても全然出てきません。ところが人道支援の現場に行くと、支援団体はちゃんとわかってこの2つの問題に対応しています。実際に、西スマトラの支援事業はちょうどこの2つに集中していました。

どうしてこの2つの支援事業に集中したのか。個別の支援団体に尋ねても、西スマトラの地域の特徴を理解した上で支援事業を組み立てたわけではなくて、現地で人々の話を聞いて、みんなが必要だと言っていることを聞いていくうちに、はじめは物資を配ったりしていても、しだいに話が衛生的な水と耐震建築の2つに収斂していったようです。結果として、その地域が被災前から課題としていたところに対応した支援事業を行っていたということです。

学会でこの話をすると、それを聞いた西スマトラの地域研究者が「それを聞いて西スマトラのことがよくわかった」と言ったりします。人道支援事業にはそのような「地域のかたち」を見出す力があるにもかかわらず、本部への報告書などではそういった意義の部分は出てこなくて、どこで家を何軒直したという報告になります。でも、ここで言ったような「地域のかたち」を表現するのが重要ではないかと思います。

さて、これまでの話をまとめます。地域研究者は、「地域のかたち」を見出すことを専門としています。このシンポジウムにあたって私がいただいたお題は、現場を見て「地域のかたち」を見出すのを私1人がわかるかどうかではなく、どうすれば人道支援の実務者にもわかるようになるのか、その方法を考えるようにということでした。今日までまじめに考えてきたのですが、考えた結果、それは難しいというのが私の結論です。

考えた過程を3つの段階に沿って紹介します。1つめは「人道支援版『家庭の医学』」です。人道支援の現場でこういう事例を見た、それはこう解釈できる、という事例と解釈のセットをたくさん集めてデータベース化して、検索できるようにしておく。『家庭の医学』のようなものですが、でも医学と違って対象が人間社会なので解釈の妥当性が時代や地域によって変わるため、あまり現実的でないかと思います。人道支援と地域研究はそれぞれ専門性が異なるので、お互いに相手の専門性を身につけようとする必要はなくて、それぞれが自分の専門性を磨いた上でお互いにどう接点を持つかを身につけた方がいいだろうということです。

(3)パダンパリアマン (2009年西スマトラ地震)

・「なぜ不便で危険な尾根に住むのか？」

雨季(9-12月ごろ)。水が特定の地域・時期に集中。水は豊富にあるが管理できない
水難・地崩れを避けて水のない尾根に居住

・衛生的な水+耐震建築

家ごとの貯水槽(雨季)+川への水汲み(乾季)。地震で貯水槽が壊れる
水難・地崩れによる転居...簡易な作りの住居



①前後からの降水で冠水する道路



②雨水による土砂崩れで路肩が崩れた道路



③屋根を使って雨水を集め貯水

おわりに

「地域のかたち」をどう読み解き、それに即した意義をどう表現するか

①人道支援版『家庭の医学』?

現場で観察される事象とその解釈例をデータベース化して検索
対象が人間社会なので時代や地域による変化が大きい
人道支援と地域研究の専門性は異なる。それぞれの専門性を磨き、他業種・他分野と接
合しやすくなる努力を

②地域研究者の「人材バンク」?

「地域研究者」は多種多様な背景や関心を持つ人々の総称
小規模であっても意欲と関心を持つ人が具体的な協力を積み上げる方が有効

③地域研究者を被災地に!

地域研究者は地域と長く関わる...支援団体が撤退した後の様子を自主的に調査
人道支援に馴染んだ地域研究者を集められる(「かかりつけ」の地域研究者を)

では、地域研究者と人道支援をどうつなぐのか。2 つめが地域研究者の「人材バンク」です。地域研究者といっても多様で、私のように災害があると被災地に行って「地域のかたち」を見出すとか言う人もいれば、災害には関わりたくないという人もいます。いろいろなタイプの研究者がいて、それを一括りにして地域研究と呼んでいます。だから、地域研究者の一覧表を作っても、それが有意義なリストになるとは限りません。それよりも、小規模でいいので、意欲と関心を持つ人たちが具体的な協力をしていくことから始めるしかないと思います。

そのためにどうすればいいのか。3 つめとして地域研究者を被災地に連れていくことを挙げておきました。地域研究者は、特定の地域や特定のテーマに深くコミットして研究します。私もそうですが、地域研究者が取り組んでいる研究テーマは、多くの場合に最初の出会いはたまたま

だったりしますが、いったん出会うとその後ずっと取り組むことになります。もし地域研究者を被災地に連れていって、災害対応の初期の段階から一通り様子を見せておいたら、その地域研究者はその被災地が 10 年後、20 年後、30 年後にどうなるかをずっと追いかけていくはず。人道支援団体がおもしろいなくても、研究費を渡さなくても、自分で研究費を工面して研究し続けるはず。

人道支援では撤退した後のフォローアップが問題になりますが、私の提案はこの問題の解決にも繋がります。最初に被災地に地域研究者を連れていけば、後は自分たちで研究していくはず。被災直後は数ヵ月に一回程度、1、2 年たったら年に一回程度、さらに長期化したら 2 年に一回ずつといった感じで、その地域研究者を招いて復興状況についての報告会を行えばいいんです。すべての地域研究者が人道支援に馴染むとは限りませんが、そうやって長期的に地域研究と人道支援が関わる場を作っていくことで、人道支援に馴染んだ地域研究者が少しずつ増えていくし、何かあったらこの人に頼めるとい人も確保できることになります。

さきほど言った『家庭の医学』に絡めて言えば、「かかりつけ」の地域研究者を持つということになります。そのためにはまず地域研究者を被災地に連れていってみるということです。行く前には忙しいとか業績にならないとか消極的なことを言うかもしれませんが、いったん連れていってみれば驚くほど変わるはず。今回私がいただいたお題に対して正面からお答えすることにはなっていませんが、以上のように考えてみました。

石井 山本さん、ありがとうございました。桑名さんは、プロジェクト主義に陥る弊害として、プロジェクトが意図しない社会全体への影響について述べられましたが、山本さんのご報告は、最初の事例などは、社会全体に対するインパクトがもう少しわかっていたら、そのプロジェクトの意義が、逆に評価された事例であるかと思いました。社会全体へのインパクトというときに、かかりつけの地域研究者が、今後もしかしたら活躍する可能性があるかもしれないとお話を伺いました。ありがとうございました。